

献 辞

経営学部教授 今 木 秀 和

徐龍達先生は、2002年度末をもって定年で退任されます。就任されたのが1963年ですので、実に40年の長きに亘って桃山学院大学にお勤めになりました。定年規定が非情に感じられるほど先生はお元気ですが、やむを得ないことと存じます。先生の長期間に及ぶご勤務とご尽力とご功績に対して、敬意と感謝を申し上げます。

私は学生時代から、徐先生のドイツ会計学の分野に於けるご高名はよく存じておりました。私が大学時代に教えを受けた師匠に『近代会計の構造』という著作があり、大学1回生の時に、この本を教材としてドイツ会計学の構造理論を学説史的に勉強しましたが、その時、徐龍達先生のお名前を『W. レーマン動的会計論』の訳者として見た記憶があり、これが私が先生のお名前を知った最初であります。

私が初めて先生をお見かけしたのは、桃山学院大学が日本会計研究学会の関西部会を昭和町学舎で開催した折りであります。当時私は、鹿児島の大学に勤務しておりましたが、たまたま関西に何かの用事で来ておりました。師匠から折角の機会だから桃山学院大学の関西部会に出席するようにとの指導を受け、昭和町キャンパスのC館の大教室に行きました。会場は盛会で多くの参加者がいましたが、その時徐先生を壇上でお見かけしました。部会終了後、徐先生と兄弟弟子の關係にあり、徐先生と大変親しい師匠から私を徐先生に紹介していただきました。その時、先程の壇上の人物が徐先生であったことを知った次第です。

私が親しく徐先生とお話するようになったのは、私が桃山学院大学に赴

任してからです。赴任してすぐ先生と話しをする機会がありました。話しをしておりますと、一種の迫力が伝わって参りました。並の大学教授にはない強さと凄さが感じられました。この迫力は、先生が単なる書斎人ではなく、行動する知識人であることに由来することをその後次第に知ることになりました。

先生を次第に知ようになって、先生の性格が極めて剛であることを実感するようになりましたが、その剛直さは先生の信念の強固さに依ることを覚りました。先生の信念の強固さは、定住外国人への差別撤廃に対する揺るぎない確信、人権尊重への強靱な意志に由来するものであることをほどなく納得した次第です。先生の迫力は、この強固な信念と定住外国人の差別撤廃運動で培った気迫の現れであると了解しました。先生は時にタフ・ネゴシエーターであると評されますが、先生をそのように理解しますと、そのような評言は至極当然のことと言えるのだと考えます。そしてそのような評言は先生に対するこの上ない賛辞であるとは私は思っております。

徐先生は剛毅な性格の反面、実に細やかな配慮をされる方であります。またユーモアのセンスに富んで、ときにシャレを乱発して周囲を笑いの渦に巻き込むことがあります。硬軟兼ね備えた人柄にある種の人間的魅力があり、長たるの器を示しておられると思っています。現に先生は各種組織の理事長、会長、委員長などを歴任してこられています。

先生は、長たる器であることは確かなのですが、私の見るところ先生は、動乱期に活躍するリーダーではないかと思っています。守成型のリーダーでないことははっきりしています。現に先生は、大学紛争の盛んな時期に経営学部長の任をりっぱに果たされたと評価されています。また定住外国人の差別撤廃運動の先頭に立って、厳しい事態を切り開いてされました。

徐先生は、大学教授として大学人の一員ですが、実に多様な側面を持ち併せておられるとかねがね感じ入っております。ジャーナリストとしてのセンスも人に抜きん出ておられますし、会計学の知識に裏打ちされた事業家的才覚を垣間見させる意見を開陳され、なるほどと納得させられることがありま

す。また大きな趨勢や動向を見極める大局観にも優れておられ、問題を的確に見通し、処理する政治家の素質にも瞠目すべきすぐれたものを具備されておられると密かに感心しております。

徐先生は、定住外国人の差別撤廃運動の展開の中で、その人権思想を鍛えてこられました。「アジア市民」ということを提唱しておられます。私ははじめてこの提唱を聞いたとき、岡倉天心の「アジアはひとつ」という有名な言葉を連想しましたが、この提唱は徐先生が韓朝鮮人としてのご自身のアイデンティティに立脚しつつも、視野を広く持っておられることの明白な証しであると判断しています。先生は批判精神が旺盛で、日本の現状にもさまざまな警鐘を鳴らしておられます。先生の言論には傾聴すべきものが多いと思っております。

徐先生は退任後も1年間大学院・学部演習科目のご担当で大学にお見えになります。その際引き続き後進の私共をご指導くださることをお願い申し上げますとともに、退任後も健康にめぐまれ、さまざまな分野でいっそうご活躍されることを心から念じて止みません。